



TITLE:

人[文]地理學上より觀たる日本の都市(下)

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

CITATION:

小川, [琢]治. 人[文]地理學上より觀たる日本の都市(下). 地球 1926, 5(6): 503-514

ISSUE DATE:

1926-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183118>

RIGHT:

地球 第五卷第六號 大正十五年六月一日

人文地理學上より觀たる日本の都市（下）

小川 琢治

五、市場町

人口の聚合を増進し都邑の成立を確定するのは經濟關係で、生産品の交換の必要から生じた市は何れの文化民族にもあつて、農村の間に經濟中心となつて都市に發達するのである。故に前篇に述べた如き地方の行政軍事等の關係から古く發達した都市と雖も一面には此の如き經濟生活の活動を繼續し得るや否やがその盛衰を決定する。

平安朝以前の市に關しては應神朝の輕市^{カル}、雄略朝の餌香市^{ヒナガ}、武烈朝の柘榴市^{ツバイイチ}、敏達朝の阿斗桑市^{アトクワ}等があつて奈良朝まで續いたとの柴（謙太郎）文學士の説に従へば、古くから此の如き小經濟的中心が市によつて出來たことを想像し得る。然れどもその都市としての形態を復原する手がかりとなる材料の乏しいのが遺憾である。

平安朝の國術の所在地で今尚ほ都市として連綿と存立する一例に越前武生町がある。此の南北に

延長した市街中央の大通に流水ある溝を通じ、その兩側が道路となつてゐる。此の型式は内田（寛二）文學士に従へば東海道その他の大街道に當る村落に往々今尙ほ殘存し、駄獸（牛馬）が運輸交通の主要機關であつた徳川幕府時代の面影である。然れども奈良平安兩朝まで溯つても同じ機關が行はれて、驛（ウツキ）が交通路の停留點となつてゐたのであるから、恐らくは今の武生町に見る如き型式が地方の經濟中心たる市の立つ都邑一般に行はれてゐたらうと想像される。

市が都邑の成立を促がしたことが地名に明かに示される例は二日市（筑前）三日市（越中）四日市（伊勢、豊後）五日市（武藏）六日市（越後）七日市（石見、越後、羽後）八日市（近江、下總）十日市（越後、古志、中魚沼）等の場合に見る所で、多言するまでもなく市日を定め一定の場處に附近の農民が集る習慣が続いて終に立派な一地方の經濟中心として都邑に發達したのである。然れども此の如き小中心が大きな都市に生長するには廣く遠方から貨物の集湊し得る交通の便あることが必要で、單なる農村中の市場たるのでは大市街にはなり得ぬ。伊勢海の要津たる四日市を除いては數萬の人口を有するものが何日市といふものに見當らぬのは此の關係に職由すると思はれる。

尙ほ市場の存在を示した地名には古市今市等の如く一地方に二つ以上の市場が順次出來た徑路を語るものがあるのは面白く、此等の都邑に就いて詳らかに調べたならば種々の有益な經濟史上の材料が發見されることゝ信する。

自分の嘗て見た市場町の一例は豊後國大野郡三重町で、此の山間の小市街は眞野の長者炭焼小五郎の長者傳説と關聯した起源に頗る古い場所である。三重町は臼杵から西南約六里半の距離に在る阿蘇熔岩の造つた印陵間の小平地で、竹田臼杵間で稍著しい地方經濟の中心を成してゐる。此の市場の起源を語る傳説では都から玉津姫が此處に夫たるべき男を尋ね來つて小五郎の妻となり、炭焼を營む間に黄金を發見したので長者となつたといふ。而して夫婦の信仰で得た一人娘般若姫の婿擇びに當り、その婉美の名を聞き敏達天皇の皇子用明天皇が草薙男となつて來て居て三重の松原の流鏑馬に絶技を示して婿となつたといひ、この般若姫の父母と娘の信心で臼杵の西一里半の深田に満月寺を起し、阿蘇熔岩の邱腹に摩崖石佛數十軀を刻んだといひ、この長者が支那から請來した高僧が蓮城法師で、三重市場にも一區の寺を起したといひ、石佛寺院及び長者の年代を奈良朝以前に在りとして佛敎の日本渡來の先驅が此處に先づ達したとしてゐる。

然れども深田石佛は石の彫刻として日本に比類なき傑作ではあるが、その様式は大分市南國分寺遺蹟に近い岩屋寺藥師その他の摩崖諸佛に比して新らしく、平安朝初期以上には溯り得ないもので嘉永承安の紀年銘ある一石の五輪塔三基の發見により平安朝末期(平家時代)に續いて鎌倉時代に及ぶ間に作られたものと思はれ、従つて市場の起源たる大野郡の開發も亦た平安朝以前までは溯り得ない。

此の場合に最も注意されるのは深田石佛の様式が浙江省杭州西湖に吳越王錢氏の作つた靈隱の石佛に類似する點で、内藤湖南博士が自分の初めて發見した際に嘉應の拓本字體が宋人の手に成つたらしいといはれたのも、此の石佛が大分の唐代洛陽龍門の石佛の様式を傳へたるに反し、南支那との交通が晩唐五代北宋の間に行はれた證左たることである。是から平安朝に入つて中央政府の遣唐使船が廢された後に九州東岸からの直接交通が連綿と行はれて、臼杵がその要津となり更に奥地にこの海外貿易を營む長者が居たことを推測せしめるに足り、蓮城寺所藏の姫の持佛と稱する六朝小鍍金佛及び秘佛千手觀世音の如きも、陸奥金色堂ほどの豪華ではなくとも、金鑛の採掘と海外貿易とで九州の一隅に他の地方に比して著しく繁榮に誇つた豪族の記念物となつてゐる。

眞野長者の經濟上の勢力圏が廣かつたことは般若姫が用明天皇の召に應じて海路東上し、途中周防柳井津に立寄り、その持佛が伊豫高濱に漂着したといふのに明かで、柳井津の西の般若等に長者後裔の建てた石碑を傳へ、高濱の大山寺には長者堂が残つて、傳説の全くの虚構ならぬを語つてゐる。

この一例は石佛研究の副産物として平安朝の間に開發された地方經濟史料の缺陷を補ひ得たと同時に、地方の市場が決して輕視す可らざる意義を有したことを示すものである。此の如く傳説、古蹟及び遺物に關する歴史的并に考學的の調査は地方に於ける經濟中心の歴史的發達を探知する手段となり得るのであるから人文地理學上の研究に當り之に注意することは決して無意義であるまい。

六、鳥居前町及び門前町

として普通の市場町と區別すべき市街がある。此の如く神道及び佛教と關聯して發達する市街の成立する徑路は神社の祭禮と寺院の會式に多數の信者の禮拜の爲めに參集するので臨時の市場が出來、又た常時の來賽者の爲めにも市塵が開かれるのに在るは言ふまでもない。

此の如き都市の巨擘が伊勢大神宮に附隨して出來た宇治山田であるのは全國民信仰の中心たる關係からの當然の結果で、之に次ぐものゝ中琴平(讃岐金毘羅)、長野(善光寺、成田、杵築(出雲大社))宇佐、太宰府等が著大で、その他の市街地を成した町村に至つては殆んど枚舉に暇ない位にある。

此等の都市に共通なる特色の一は神社の鳥居及び寺院の門の内外に道路に沿ふて商店が軒を並べて列立し、狹長なる市街地區を成すことである。その平面圖は内外兩宮を連結する宇治山田間の間ノ山の場合に見る如く、全く遠方から來集する參詣人の宿泊とその持ち歸る土産物を賣る店、田舎者の耳目を樂しませる見せ物店等が目立つてゐる。信濃の善光寺讃岐の金毘羅等ではその門前(金毘羅は鳥居前)に一直線に此の如き商店が發達して出來た形勢は現在の市街圖に顯然と認められる。我々は此の如く神社及び寺院の存在が成立の原因となつた都市を區別して鳥居前町及び門前町と呼ぶを適當と考へる。

信仰の中心が人口集中を起して都市の存立と繁榮を維持するは上に舉げた如き場合以外にも屢々

見る所で、千餘年以前に首府としての意義の消失した奈良京の東北郭外に東大寺大佛と春日神社のある爲めに都市として今日まで續いたのがその最も著しい例である。京都の如きも東西兩本願寺と北野天神が各熱鬧なる街衢を成し、前者の門前の佛具屋及び宿屋は市内の他の部分と全然異つた形相を呈してゐる。

東京郊外の目黒不動、新井薬師、龜井戸天神等が郊外地に住宅の密集する以前の聚落で、他の農村から發達した接續市街地と異つた點も亦た著しく、是から推して江戸城の出來た初めの淺草觀音附近の狀態が想像されて面白い。

我々が茲に此の都市の型式を區別する動機は明治三十八年の秋能登を旅行した際に鳳至郡に門前といふ大字があつて、武藏鶴見に移轉する以前の總持寺本山の門前に當り、その會式に遠近から來賽する善男善女の絡繹として、文字通りに門前市を成すの盛況を目撃した經驗に在つて、是から門前町といふ名稱を考へ着いたのである。藤田文學士が昨年の本誌談叢欄に記載した盆踊の歌は我々は多分若狹から北陸の海岸に沿ひ、鎌倉時代の末期に起つて南北朝に下り二世峨山（圓明國師）の振興した曹洞一派の本山總持寺に詣る航路を示すもので、五百餘年前に商賣の往復があつた記念であると推定した。若し果して然りとせば此の門前とその出入口の港灣たる劍地邊が寺院と共に起つた地方の經濟の中心を成したのである。

緣日の市が東京をはじめ到る處の市街に行はれ、中には神社佛閣そのものが餘り著名でなく、この市あるが爲めに存在の知られ、「緣日商人」の如く緣日の神佛も亦た信仰の目標として餘り權威のない場合が多いことには注意を要する。

最後に附加へねばならぬのは明治年間に信仰が原因となつて繁華な市街が起つた著明な一例丹波市で、この天理教會の本山に向つて全國信者の來集する爲めに春季汽車の混雜は本願寺參りに劣らぬ盛況を呈し、關東に於てもそれ程に重大ならぬまでも河崎の近傍に穴守稻荷が榮へ始めてからその參詣人の雜沓が大師參りを凌ぐかと疑はれるに至つたのは何人も知る所である。

之を要するに神佛の信仰が心核となつて都市の成立することは村落の氏神と形式に於て類似するもその發達は地方的經濟機關の活動に伴ふのである。故に交通の便否がその繁榮の程度を制限するのは當然で、神佛の威徳利益リキクも往々にして交通機關の發達によつて發揮顯揚されるのである。

七、遊樂町

と呼ぶべき特殊の市街地がある。是は温泉、海水浴、遊園、遊廊等を含むもので、地方的經濟の中心が都市を成す如く地方人の遊樂の目標となるに足る何かの引力ある土地が此の如く發達する。温泉町の成立は全く地質上の關係で決定されるもので、日本に於ける温泉の湧出は活火山地方又は火山岩噴出地に在るものが多數を占めるは勿論で、關東地方の熱海箱根伊香保鹽原、九州の別

府、温泉ウレンゼン、阿蘇の如きはその第一に屬し、紀伊山陰北陸等の諸温泉はその第二に屬し、瀬戸内海に面する道後湯田等はその關係不明なる著しいものであるが極めて少數である。

温泉の發見の歴史は平安朝以前に溯り得る位古いものが多く、醫藥醫術の幼稚なる時代には現今よりも人生に重要視されて多數の浴客が來集するから、その成立の古いものは特殊の市街地を成すのである。道後有馬等はその好例で、主もな泉源に設けた浴場に混浴する習慣が行はれ、浴場を中心として宿屋及び温泉寺に附屬した寺院(宿坊)が之を圍繞してゐる。此の如き温泉に來る農民が自ら米を齎らして合宿するので普通旅舎と異つた本質の仕組が出來てゐる場合が多い。

此の原型と著しく異つたのは近頃掘鑿して開いた温泉地で、伊豆長岡、箱根強羅、鳥取カイン皆生等の如く全く文化住宅から成り、海岸地方に開けた避暑避寒別荘地と區別なき形相を呈してゐる。

海岸に發達しつゝある海水浴地は位置の關係から種々の散布式聚落を成す場合が多く、特に古く風景の勝地として名ある近畿の須磨明石和歌浦關東の武州金澤の如きは、熱鬧なる大都市から近距離にあることがその發達の要因を成し、大阪の南郊住吉濱寺の如きは極端な發達をなして、全く遊園地から大都市の一部に變形しつゝあるものをも認める。

遊覽の客を引く行樂地の發達するに當り屢起るのは休憩飲食宿泊を業とする旅亭旅舎貸座敷を有する花柳街である。此の如き營業が最も古く盛んであつたのは伊勢參りを顧客とした宇治山田であ

つて、伊勢音頭の劇曲にその名残を留めてゐる。關東の筑波山の半腹にある筑波の市街が明治年間に至つても尙ほ普通旅館一戸の外は貸座敷であつたのは平野農村からの行樂地たる關係に職由したのは同じく著明な例である。

此の如き特殊の構造の家屋は明治以前には東海道中仙道の主要宿驛の大通りに櫛比してゐたが、今は次第に消失しつゝある。然れども公娼の許される日本の現状では遊廓町なるものが遊樂町の特殊の形式として尙ほ存続する筈であるから一言せねばならぬ。

八、軍港町、商港町、鑛山町

都市を人類の經濟的及び政治的機能の發現した型式として考察すれば尙ほ茲に列舉した外に互に頗る異つた種々のものが認められる。軍事上の關係で發達した鎮守府のある軍港町の如きは數に於て少いが、戰艦の能力を維持發揮するに必要な特殊の施設がある點で商船の出入の便否から割り出した商港と異なるは勿論、その地理的位置及び地形も亦た戰略と關係して重大なる意義を有してゐる。軍港は時として國際關係の變化に伴ひ激變するもので、歐洲戰爭の際に英國の大艦隊を集中して獨逸海軍と對峙したスカバ・フロー Scapa Flow の如きは蘇格蘭の東北岸オークネー諸嶋の間に包まれた稍廣い水面で、休戰の頃に至つてその名が俄かに世界に著はれ、而かも現今は再び艦艇の檣影を絶ち、浮鷗の眠穩かな舊風景に返つたことゝ想像される。

之と全く意義の異なるものは大なる經濟的中心たる陸内の都市又は船舶の出入に不便なる大都市に伴ふ商港町である。此種の都市の最も古いのは平安朝までの難波津南北朝以後の堺港であらう。現今の日本では東京に對する横濱、大阪に對する神戸、名古屋に對する熱田等で、その發達は中心の經濟に相應して進むもので、三者共に次第に主都市と聯續した市街地に變化せんとする趨勢を示しつつある。

鑛業は多くは山地に行はれるから足尾小阪等の如く周邊の人口聚合に不便なる事情と無關係に起り得ると共に、その盛衰も亦た豊富な鑛床の採り盡されると共に死滅する運命を持つのである。その最も有名は例は北米ネブダ州のブーチニア・シチーで、神話の如きコムストック・ロード鑛山の金銀鑛の採掘で、グレート・ベジンの曠原中に突然として蜃氣樓の如く出來、一八六四年にはネブダ州を一州として認めるまでに榮えたのが、鑛源の涸渇と共に再び沈淪して十一萬方哩の全州の人口十萬内外に過ぎぬ状態となつた。是はカリフォルニア州が金鑛の發見で榮に始めて、農業が開け續いて油田の開發で長足の發達をなしつつあると正反對の現象である。日本でも院内阿仁等の徳川幕府時代からの諸鑛山町は此の如き悲慘な運命を免れなかつた。

此の如き山間の鑛山町と著しく特性を異にするものは第三紀層中に埋藏された石油及び石炭の場合で、何れもその分布地域が廣い關係から、日本の油田の如く涸渇し易いものでも精油場を有する

柏崎の如く三十餘年間に繁榮を増し、北海道、常磐、筑豊、京津、三池等の大炭田地方に至つては現在の如く炭價と採炭費の比率が採算を困難ならしめる事情あるに關らず、閉山するものは戰時好況時代に勃興した小規模の炭坑に限られてゐる現狀である。

炭鑛町の面白い代表者は三池炭田の大牟田市と山口縣の宇部市である。前者三井家の大規模の採炭計畫の下に内地最大炭坑に發達した上に、紡績亞鉛製鍊等の工業も興つたので海岸の一大市街となり、東洋のカーヂともいふべき石炭積出港を兼ねてゐる。宇部市は三池炭に比して炭質劣り炭田としての價値は必ずしも優良なりとはいへぬに拘はらず、農村が一躍して市制を敷き得るまでに發達した。その徑路は全く村民等の協同一致した犠牲心で炭坑の經營が成功し、終に立派なる市政を行ひつゝあるといひ、日本の都市に共通なる幾多の弊害に超越した模範的都市が炭鑛地方に發達した奇蹟たるは實に快心に堪へぬ。

紡績その他の工業により繁榮する都市は一括して工業町といふべきもので、近年各地方の都市にして苟くも鐵道及び汽船の交通の便ある處には何等かの工場を見ざるなきの狀況を呈し、一々之を區別するの繁に堪へぬ。その中最も多きは紡績工場であつて、是は原料の運搬が比較的容易であるから、動力と労働者を得るの便ある處に工場が設けられて、東京京阪に先づ興つた工業が次第に地方化して行きつゝある結果である。

唯一つ區別すべきものに醸造町がある。是は近畿の灘五郷と關東の野田及び銚子の醤油との兩醸造業地に見る所で、前者は西ノ宮市の戎神社に因みて宮水と稱する釀酒に適する清水の湧出すると瀬戸内海の海運が古くから便であつた關係から全國に冠絶する醇酒を生産するのである。關東の醤油釀造業は之と趣を異にし、純然たる農産工業が水田少くして麥大豆の生産額の多い大平野に興つたもので、紀伊湯淺の隣村廣村漁民の九十九里濱移住者が湯淺醬油の釀造法を傳へて漁港銚子でその製造を始めて、終に全國に供給する盛運を開いたのである。而してこの兩工業が共に日本の傳統的工業で他の工業の外來影響を受けずに發達を續け得た稀な例として面白い。

日本の都市は現に行はれつゝある都市計畫の實現により形相の激變を見んとする轉機に在る。茲に記載した都市成立の起源の相異とその發達を支配した事情との現在都市の形相に與へた特色が如何に抹殺され行くかは單なる興味ある人文地理學上の問題たるに止らずして、一般經世の人士も亦た留意熟考すべき所があらうと信する。(完)